

## 第8章 日本語教育への応用

第2章から第7章までは、因果関係を表す複文における両言語の対照研究を行ってきた。接続類型と因果関係の度合いとの関連、接続表現の機能と使用範囲、各構文モデルにおける接続表現の機能などを視野に置き、広範かつ多角的に比較分析を行うことによって、両言語の類似点と相違点を明らかにした。

これまで見てきたことは、当然のことながら、日本語教育にも応用できると考えられる。本章では、研究結果を踏まえながら、日本語教育との結びつきについて述べたい。

### 8.1 課題提起

日本語の因果関係を表す複文に関する先行研究には、接続表現の意味機能、使用方法、類似表現間の使い分けに注目して書かれたものが極めて多いが、他言語との比較対照研究はあまり目にしたことがない。「から・ので・ため(に)・て」の使用法または相互の使い分けに関しては、主観的なものか客観的なものかといった主観論と客観論との対立をめぐって議論された論説がほとんどである。多くの論説で記述されていることは、表面上の言い回しが異なっても、本質的には大同小異である。すなわち、日本語の接続表現の使い分けは文末のモダリティ形式と深く関係しているとしか論じられていない。日本語教育においても、「から」と「ので」の意味機能、使い分けについての説明は、参考書または教科書では、「から」は主観的であり、「ので」は客観的であると書かれている。

確かに日本語の接続表現の使用はモダリティ形式の制約を受けるか否かといった点において相違が見られ、重点を置くべきところである。中国語母語話者の日本語学習者を指導する際、接続表現とモダリティ形式との関わりを考慮するだけでなく、中国語の特徴や日本語との類似点、相違点に関する知識も把握する必要がある。

因果関係を表す複文における両言語の明らかな違いは、日本語が節と節をつなぐ度に接続表現を用いなければならないのに対して、中国語は接続表現の使用の自由度が高く、表現意図によって用いたり省略したりすることができるという点である。要するに、中国語は形態の制約を受けないので、表現類型を多様化することができるのである。たとえば、次の例[1]では、接続表現が使用されていないが、接続表現を使用できないわけではない。

- [1] 她考试的成绩很好，心里很高兴。 《青春》  
 成績は拔群だったので、とても嬉しかった。 『青春』

[1] では接続表現が使用されるとすると、3通りの表現類型が考えられる。

- [1'] 因为她考试的成绩很好，心里很高兴。 “GP, Q” 従属節のみ接続表現使用  
 [1'"] 她考试的成绩很好，所以心里很高兴。 “P, GQ” 主節のみ接続表現使用  
 [1'"] 因为她考试的成绩很好，所以心里很高兴。 “GP, GQ” 従属節と主節ともに接続表現使用

[1]のように接続表現が使用されず、意合法によって前後節の表現内容から意味関係を読み取るのが、中国語の因果関係を表す複文においては普遍的な表現方法である。とりわけ会話の中では、接続表現が使用されない方が使用される方より自然である場合が多い。中国語では、接続表現の使用は必須とされていない。このことから中国語母語話者の日本語学習者は母語の影響を受け、接続表現を脱落させる傾向があると考えられる。

しかしながらこれは単なる表層上の問題点であり、第2章～第7章の比較対照を通して、表面化されていない問題点も多く潜んでいることがわかっている。つまり日本語教育の現場において無視できない点、または認識すべき点がまだ多く存在していると思われる。したがって本章では、まず研究結果に基づき、いくつかの視点から中国語母語話者の日本語学習者の習得上の難点を提示する。そして、日本と中国で広く使用されている教科書や教師用マニュアルにおける因果関係を表す接続表現に関する扱い方を考察し、問題点を明らかにする。最後に日本語教育への提案を試みる。

## 8.2 因果関係を表す複文における習得上の難点

- ① 因果関係を表す複文に関する認識上の違いと接続表現の脱落との関連性
- ② 接続表現の機能への理解
- ③ 接続表現の使用と諸構文要素との関わりへの理解
- ④ 複数の原因節における接続表現の使用と接続表現の機能への理解

### 8.2.1 因果関係を表す複文に関する認識の違いと接続表現の脱落との関連性

日本語は、物事の発生・変化または行為、感情的な評価について述べる場合、発生・変化の原因、行為が行われる理由、そう評価する理由に関して、必ず接続表現を用いて表現する。したがって、日本語の因果関係を表す複文のフレームワークは非常に広い。日本語と同様のフレームワークで中国語の因果関係を表す複文について検討してみると、日本語では因果関係を表す複文として認められているものであっても、中国語では因果関係を表す複文として認められにくいものになっている。たとえば、

- (2) 「まるで犬に芸を仕込む気であるから残酷だ。」 『吾』  
“简直像教小狗练功，太残酷。” 《我②》

(2)の主節「残酷だ」は話し手から見て従属節の他人の行為に対する感情的な評価になっている。つまり、従属節がなぜそう評価するかという理由を表している。原因・理由を表す「から」が使用されており、因果関係を表す複文となっている。しかし、このような感情評価の原因・理由文は、中国語では、なぜそのように評価するかといった理由については明示せず、単なる話し手が一方的に感情を述べていると考えられ、「感嘆文」だとして扱われている。中国語では物または他人について評価する場合、理由より、話し手の気持ちをストレートに表出することが重視されており、この種の文における前後節の意味関係が因果関係だと認識するのが非常に難しい。

また、自然描写文における因果関係への認識度も低いと思われる。自然現象の形成と変化について述べる場合、形態を重視する日本語では、自然現象の形成と変化の原因を明示する。それに対して、中国語は同じ空間にある景色を一体化して、影響を与える側と影響を受ける側に分けずに、単なる同じ空間に存在する自然現象だと考えて描写するため、節と節の関係は因果関係にならず、並列関係である。

- (3) 金色だった夕焼けの雲が徐々にむらさきに変わって行き、林の上にはカラスが群れて、  
さわがしかった。 『氷』  
西边天空中的金色浮云慢慢变成紫色，林梢乌鸦成群，哇哇啼叫。 《冰》

(3)では、因果関係を明示しない「て」が使用されているが、主節の状態は従属節から影響を受けて形成した結果だという意味合いを読み取ることができる。中国語の訳文には、そういった意味合いは含まれていない。単なる目の前の風景に関する描写であり、節と節の関係は並列関係になっている。このようなずれからも、中国語母語話者の日本語学習者にとっては、自然現象の形成と変化の原因・理由文における因果関係の存在を認識しにくいと言えるだろう。

以上述べたもの以外に、会話文では、頻繁に使用される発言・態度の根拠を表す文への認識度も低いと想定される。日本語では、主節に依頼、命令、勧誘などといったモダリティ形式が来る場合、そのような発言をしたり、そのような態度をとる根拠を従属節で「から」または「ので」によって示し、因果関係を表す複文の一種として扱える。一方、中国語では、「発言・態度の根拠」を表す文も、因果関係を表す複文の一種だと認められるが、この種の文には接続表現の使用はなじまない。このような傾向は両言語の対訳を行う中で明らかになっている。

- |                                   |      |
|-----------------------------------|------|
| (4) 「写真を仏壇へ祀るなど、縁起が悪いから止めなさい。・・・」 | 『黒』  |
| “把相片摆在佛堂里祭奠不吉利，不要这样做，・・・”         | 《黒》  |
| (5) 「・・・面白そうだから行ってみませんか。・・・」      | 『青』  |
| “・・・听说很有意思，你能去吗？・・・”              | 《青》  |
| [6] “没有；我走回去吧，你拉着车。”              | 《駱》  |
| 「なんともない。わたしは歩いて行くから、車を引いてきなさい」    | 『駱』  |
| [7] “小林，你身体很坏，把这件背心穿在身上吧。”        | 《青春》 |
| 「道静、あなたは身体が悪いから、これをきなさい」          | 『青春』 |

(4) (5)は原文が日本語であり、[6] [7]は原文が中国語である。日本語が原文であるものでは、「から」を用い、なぜそのような発言をしたりするのかについて根拠を明示している。一方、中国語訳文では、そういった根拠が示されていない。中国語原文であるものにおいても、同様な傾向が現れている。中国語原文では、なぜそのような発言をしたりするのかについて発言の根拠が示されていないが、日本語訳文では「から」を用いて根拠を明示している。このように、発言・態度の根拠を表す文においては、こういった相違点が存在しており、中国語母語話者の日本語学習者にとっては、発言・態度の根拠を表す

文が因果関係を表す複文の一種だとは認識しにくいであろう。

中国語の因果関係を表す複文においては、接続表現の使用の自由度が高いが、ここまで述べてきたことは、接続表現の使用が自由であるかどうかとは関係せず、因果関係を表す複文に対する認識上のずれの問題である。中国語母語話者の日本語学習者にとっては、こういった認識上の違いが学習上の難点となり、接続表現を脱落させたりすることが多いのであろう。

## 8.2.2 接続表現の機能への理解

中国語母語話者の日本語学習者に、「日本語の「から」「ので」は中国語に訳す場合、何と対応しますか」という質問をしたら、「“因为”“所以”と対応する」と答える人がほとんどだと予想される。確かに、日本語の原因・理由を表す接続表現が中国語に訳される場合、そのまま中国語の接続表現に置き換える「有標」の表現では、“因为”“所以”の比率が高い。しかしながら、“因为”“所以”は論理的かつ説明的な表現であり、一部の因果関係を表す複文のニュアンスを表しきれず、他の表現の使用も必要とされる。

日本語の接続表現は広範な機能を持ち、ひとつの接続表現によって、多様な原因・理由を表せる。特に構文上の制約を受けにくく、様々な文脈の中で用いられ、様々な原因・理由を表せる「から・ので」は、機能が極めて広いと言える。「から」「ので」を含む文を中国語に訳す場合、原文のニュアンスを的確に伝えようとすると、接続表現の使用には表現内容への配慮が必要となる。たとえば、従属節事態が主節の行為の理由となる「から」「ので」文の場合、中国語訳文では、因果関係を表すと同時に、継起関係も表す接続表現ないし時間の前後、継起を表す接続表現の“就/便”が多用される。たとえば、

(8) 何か私に用事がありげに見えたので、私はそっとその後を追った。 『斜』

我看他仿佛有什么事要找我，于是悄悄地跟在他后面。 《斜》

(9) 吾輩も先生と云われて満更悪い気持ちもしないから、はいはいと返事をしている。 『吾』

咱家也被尊一声“先生”，自然心情不坏，便满口答应： 《我①》

(8) (9)の例文において「ので」節と「から」節が主節で行った行為の理由となり、それらに対応している中国語表現では動的因果関係を表す“于是”と時間の前後継起を表す“便”

が用いられている。しかし、従属節事態によって、主節で動作主が心理的に抵抗のある行為が行われる場合、中国語では“只好／只得”を用いて、原文の「から／ので」に対応する傾向が強い。

- (10) 仕方がないから、又布団の上へ坐って、煤掃の時に蘆を丸めて畳を叩く様に、そこら近辺を無暗にたたいた。 『坊』  
没办法，只得又坐在褥子上，象扫除时把席子卷成圆筒敲打塌塌米似的，用枕头朝身子周围不停地拍打起来。 《哥③》
- (11) 「ええ」と仕方がないから降参をした。 『吾』  
“是啊。”我无可奈何只好认输。 《我②》
- (12) 仕方がないので他の始末に取りかかった。 『黒』  
没有办法，只好去收拾其他东西。 《黒》

(10) (11) (12)の原文では、従属節でそれぞれ「仕方がない」という表現が用いられ、主節の行為は明らかに動作主が心理的に抵抗のあった行為だと言える。このような心理的な色彩を帯びる文のニュアンスを訳文に反映させようとする、と、“只好”“只得”といった感情的な色彩を帯びる表現の使用が必要とされる。

対訳上では、他の傾向も見られるが、ここまで述べてきたことで、「から」「ので」によって表されている原因・理由は、中国語訳文では“因为”“所以”のみでは表せないということを裏付けることになるであろう。

このように、中国語母語話者の日本語学習者にとっては、日本語の原因・理由を表す接続表現の機能や、中国語との対応傾向について正確に理解することも重要であろう。

### 8.2.3 接続表現の使用と諸構文要素との関わりへの理解

日本語においては、接続表現を使用する時、主語や述語動詞、述語のテンス形式の制約を受けるものがある。「て」のように因果関係を表す機能だけではなく、他の意味関係を表す機能も持つものは、主語が有情物であるかどうか、述語が意志動詞であるかどうかによって、表された意味関係が変わってくる。ここでは、まず第5章で既に提示した「ので」の用例を再掲し、「て」との互換性があるか否か、主語、述語動詞の制約を受けるか否かに

ついて再確認する（用例番号は本章の番号順で示す）。

(13) 工場長が杉箸でコップのなかを掻きまわしたので、僕もその通りにした。 『黒』

(14) バスが来たので、わたしは古瀬達巳に断りもせずさっさと乗り込んだ。 『挽』

(13)の従属節と主節においては、主語がそれぞれ有情物になっており、述語動詞もそれぞれ動作性動詞が使用されているが、因果関係を明示する機能を持つ「ので」が用いられるために、自然な因果関係を表す複文になっている。しかし、「ので」を「て」に置換すると、因果関係を表す複文として認められなくなる。

(13') \* 工場長が杉箸でコップのなかを掻きまわして、僕もその通りにした。

(13')は従属節と主節の主語が有情物になっており、従属節と主節で異なる動作主に使用され、視点が統一されていないため、従属節と主節の間に論理関係が発生せず、単なる異なる動作主によって順次に行われた行為になっている。

(14)は、従属節の主語が非情物であるものの、「ので」を「て」に置換すると、因果関係を表す複文だと認めにくい。

(14') バスが来て、わたしは古瀬達巳に断りもせずさっさと乗り込んだ。

第5章で既に言及したように、「て」は因果関係を明示する機能を持たず、「て」が使用される因果関係を表す複文では、前後節の因果関係は「て」によって示されるのではなく、従属節と主節の表現内容によって示される。したがって、(14')のように、従属節と主節の表現内容が直接的な論理関係を持っていない場合、因果関係を表す複文としては成立しにくい。(14')の主節で行われた「古瀬達巳に断りもせずさっさと乗り込んだ」という行為は「バスが来た」によるものではなく、「古瀬達巳を避けたいので」あるいは「急いでいるから」といったような直接的な理由によるものだと考えられる。

一方、中国語ではこのような視点の制約を受けない。中国語では因果関係を表す複文における接続表現は単なる因果関係を表すものと、継起関係を伴う因果関係を表すもの、因果関係を表す機能は持たないが、時間的継起関係を表す機能を持つものの3種類に分けら

れている。中でも、単なる時間的継起関係を表す機能を持つ“就・便”は、因果関係を表す機能を持たず、因果関係を表す複文の中で使用される場合、日本語の「て」文と同じく、前後節の意味関係は表現内容より読み取られる。しかし、“就・便”の使用では従属節と主節の視点を統一させることは求められない。ここで、第5章の用例を提示し、再確認する（用例番号は本章の番号順で示す）。

[15] (因)他打了我, (結)我就打了他。

彼が私を殴ったから、私は彼を殴った。

[15] では、従属節と主節の主語がそれぞれ有情物になっており、述語もそれぞれ意志動詞が使用されているが、“就”を使用しても、自然な中国語になっている。“就”は因果関係を表す機能を持たないが、“就”と「て」との使用条件には大きな違いがあり、“就”の場合は、主節が意志的な行為であれば使用できる。

中国語では、接続表現を用いる際は、主語が有情物か非情物かといった制約より、従属節と主節の表現内容の制約を受ける特徴を持つために、中国語母語話者の日本語学習者にとっては、上記した「て」の使用と主語、述語動詞との関わりに関して、非常に意識しにくく、理解しにくい点だと言える。

日本語の因果関係を表す複文において、因果関係を表す接続表現の使用は、これまで述べた主語、述語動詞との関わりその他、テンスとの関わりがとりわけ大きいと言える。日本語では、一般にテンスは述語の基本形のル形と過去形のタ形によって表される。そのテンスは非常に複雑で、特に基本形のル形の場合、表された時間関係は、従属節先行、従属節・主節同時、従属節が主節に後続のいずれもありうる。一方、中国語においては、語形変化を持たないため、テンスの体系はまだ完全には確認されておらず、テンスが存在するといった論証もまだ定説になっていない。このように、中国語を母語とする日本語学習者にとっては、因果関係を表す接続表現の使用とテンスとの関連性については、理解に苦しむことが多くあるであろう。日本語では「から・ので」の使用はテンスの制約を受けないが、「ため(に)」の使用はテンスの制約を受ける。特に従属節に動作性動詞が使用される場合、テンスがタ形でなければ、「ため(に)」文は原因・理由を表す文として成り立たなくなる。また、従属節で基本形の状態性述語が使用される場合、持続性を持たなければ、「ため(に)」の使用にも適さない。ここで、第7章で既に提示した「から」「ので」の用例を再掲し、「た

め(に)」との互換性があるかどうか、テンスの制約を受けるかどうかについて再確認する  
(用例番号は本章の番号順で示す)。

(16) 爆音が聞えるので浅二郎さんは仲間の庄吉さんと一緒に橋の下へ逃げこんで、そこに  
繋いであった苦船のなかに隠れた。 『黒』

(17) 給仕をしながら下女がどちらから御出になりましたと聞くから、東京から来たと答えた。  
『坊』

(16)(17)ではそれぞれ「から」「ので」が使用されており、いずれも自然な因果関係を表す複文として成り立つが、「から」「ので」を「ため(に)」に置き換えると、自然さを失ってしまう。

(16') \*爆音が聞えるために、浅二郎さんは仲間の庄吉さんと一緒に橋の下へ逃げこんで、  
そこに繋いであった苦船のなかに隠れた。 『黒』

(17') \*給仕をしながら下女がどちらから御出になりましたと聞くために、東京から来たと答えた。  
『坊』

(16)の従属節の状態性述語の「聞こえる」は持続性を持たないため、基本形になっている場合、「ため(に)」の使用にそぐわない。(21)の従属節では動作性動詞が使用されており、「ため(に)」の使用に適さない。しかし、従属節の述語のテンスを基本形より過去形に変えると、「ため(に)」を使用しても、自然な因果関係を表す複文となる。

(16'') 爆音が聞えたために、浅二郎さんは仲間の庄吉さんと一緒に橋の下へ逃げこんで、  
そこに繋いであった苦船のなかに隠れた。

(17'') 給仕をしながら下女がどちらから御出になりましたと聞いたために、東京から来た  
と答えた。

日本語で原因・理由を表す接続表現を使用する際、上記のようなテンスの制約を受ける場合があるだけでなく、前後節の事態発生の時間的なプロセスの制約を受けるケースもある。

(18) あしたホームパーティーを開くので、今日大掃除をしました。

(18)の前後節の事態発生の時間的なプロセスは、従属節が主節に後続するといった時間関係になっており、「ので」を「から」「ため(に)」に置換してみると、「から」文は成り立つが、「ため(に)」文は成り立たない。

(18') あしたホームパーティーを開くから、今日大掃除をしました。

(18'') \*あしたホームパーティーを開くため(に)、今日大掃除をしました。

(18'')の「ため(に)」文が成り立たないのは、単なる従属節の動作性述語の問題だけではない。従属節の動作性述語がル形にしても、タ形にしても、この種類の文は「ため(に)」の使用が許容されない。というのは、「ため(に)」が継起性に従うものであるため、「ため(に)」を使用する場合、前後節の時間関係は、従属節が主節に先行、もしくは従属節・主節同時でなくてはならないのである。

上記より、日本語の因果関係を表す複文における接続表現の使用は様々な構文要素と関わっており、簡単に使いこなせないことがわかる。語形変化を持たず、テンスの存在があるか否かについてまだ確認されていない中国語を母語とする学習者にとっては、極めて理解しにくい点だと言えよう。

#### 8.2.4 複数原因節における接続表現の使用と接続表現の機能への理解

日本語には、因果関係を明示するものと、明示しないものの2種類の接続表現がある。ひとつの複文に複数の原因節が含まれる場合、接続表現の使用は、原因節の構文形式または接続表現の機能によって異なってくる。原因節間が並列関係である場合、因果関係を明示する節と明示しない節の並べ方は、「非明示⇒明示」といったルールを守らなければならない。つまり、因果関係を明示するものは、非明示のものを包含できるが、逆の場合は許容されないということである。「P<sub>1</sub>P<sub>2</sub>ので……→Q」は成り立つが、「P<sub>1</sub>のでP<sub>2</sub>し……→Q」は成り立たない。用例としては、以下のようなものがある。ここで、第6章で既に提示したものを再掲する。(用例番号は本章の番号順で示す)

(19) これは八千代からの依頼であるし、自動車でひっかけたという縁故もあるので、何とかしてやらねばならぬ。 『あ』

(19)では「P<sub>1</sub> し P<sub>2</sub> ので……→Q」形式で、自然な文になっているが、「し」と「ので」の位置を変えると、自然さを失ってしまう。

(19') \* これは八千代からの依頼であるので、自動車でひっかけたという縁故もあるし、何とかしてやらねばならぬ。

「ので」は並列関係を表す機能を持たないので、「ので」が前にくると、「ので」節と結果節のつながりが悪くなり、文としては自然ではない。

しかし、原因節間に論理関係があり、重層型である場合、接続表現の使用は「非明示⇒明示」のような構文形式が許容されるだけでなく、「明示⇒非明示」のような構文形式も許容される。たとえば、{(P<sub>1</sub> て→ Q<sub>1</sub> ので) = P<sub>2</sub>} → Q<sub>2</sub> と {(P<sub>1</sub> ので→ Q<sub>1</sub> て) = P<sub>2</sub>} → Q<sub>2</sub> のいずれのケースも成立する。ここで、参考として第6章の用例を再掲する。(用例番号は本章の番号順で示す)

(20) 読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味が繋がらないから、又頭から読み直してみた。 『坊』

(21) 独りで極めて一人で喋舌るから、こっちは困まって顔を赤くした。 『坊』

日本語では、複数の原因節がある場合、接続表現の使用については上記のようなルールがあるが、中国語においては、同じ構文形式である場合、日本語と異なったルールを守らなければならない。

中国語では接続表現の使用が省略される場合が多いため、原因節が複数の場合においてもそのような傾向が見られる。複数原因節の関係が並列関係であり、原因・理由を表す接続表現を使用する場合、各原因節に置くか、文頭のみ置くかの2種類の表現ケースがある。接続表現が各原因節に置かれる場合、原因節間の並列関係を維持するため、接続表現は同じでなければならない。文頭のみ置かれる場合、接続表現の働きは先頭の原因節だけではなく、原因節全体と関わっている。ここで、参考として、第6章の用例を再掲する。

[22] 因为他<sup>①</sup>不低头, 因为他<sup>②</sup>不认罪, 那伙人就把他关进了一个厕所, 《轮椅》  
彼は屈服もせず、罪も認めなかったから、あいつらが彼をトイレに閉じ込めた。

(拙訳)

[23] 因为他<sup>①</sup>骂得有理, 骂得痛快, 所以天天有人坐成一圈听他叫骂。 《钟》  
言い分が通ってて、しかもものしり方が痛快なものだから、毎日多くの人が輪になって腰かけ、それを聞いて喜んでいた。 『鐘』

[22]では各原因節で原因・理由を表す接続表現の“因为”が使用され、[23]では文頭のみ“因为”が使用されている。[22]の各原因節で同じ接続表現が使用されており、原因節間の並列関係が維持され、原因節のいずれも主節と関係していることがわかる。[23]では、文頭に接続表現が置かれているため、各原因節全体と関わり、原因節のいずれも主節と関係していると判断できる。しかし、[22]の原因・理由を表す接続表現が同一表現でないと、原因節間の並列関係を維持できなくなり、自然さを損なってしまう。また [23]のような原因・理由を表す接続表現がひとつである場合、文頭でなければ、[22]と同じく原因節間の並列関係を維持できなくなり、文が成り立たない。

[22'] \* 因为他<sup>①</sup>不低头, 由于他<sup>②</sup>不认罪, 那伙人就把他关进了一个厕所。

[23'] \* 他骂得有理, 因为骂得痛快, 所以天天有人坐成一圈听他叫骂。

このように、中国語では、複数原因節間の関係は並列関係で、複数の接続表現が使用される場合、同一接続表現を使用しなければならない。また、単数の接続表現が使用される場合、接続表現は文頭に置かなければならない。

一方、結果節に対する複数の原因節に論理関係を持つ重層型の場合、原因・理由を表す接続表現は、前の節のみに用いられ、結果節と直接的な因果関係が結びついている原因節には、原因・理由を表す接続表現の使用が許されない。なお、原因節のいずれにも接続表現が用いられないことは許容される。参考までに、第7章の用例を以下に再掲する。(用例番号は本章の番号順で示す)

(24) “夏天死的, 运不回来, 只好埋在了村后的山坡上。” 《插》

「夏に死んだから遺体を移送できなくて、村の裏の山腹に埋めたわ」 『遙か』

- (25) “她<sup>因为</sup>找不到工作，无处泄愤，<sup>就</sup>常常找我出气。” 《青春》  
「仕事の口が見つからなく<sup>て</sup>、むしゃくしゃしてるもんだ<sup>から</sup>、いつもぼくにあたるの  
さ。」 『青春』

(24) では最後の結果節に対する複数の原因節のいずれにも、接続表現が用いられていない。(25) では先頭の原因節のみに原因・理由を表す接続表現が用いられている。ただし重層型においては、文頭の原因・理由を表す接続表現の働きは先頭原因節のみと関わっている。

これまで述べてきたことから、原因節が複数である場合、両言語の接続表現の使用にはずれが多いということが明らかである。このようなずれが存在しているため、中国語母語話者の日本語学習者にとっては、構造がより複雑な日本語の因果関係を表す複文における接続表現の使用が習得上の難点となるわけである。

8.2.1～8.2.4 では4つの側面から、中国語母語話者の日本語学習者にとっての習得上の難点を挙げた。それらは本研究の比較対照結果に基づき、習得上のより難しい点だと考えられるものである。中国語を母語とする日本語学習者にとっては、原因・理由を表す接続表現について習得する際に、これら以外の難点の存在も考えられる。たとえば、接続表現の使用と原因節の焦点化との関連性およびその表現形式への認識と理解や、接続表現の使用と因果関係の度合いとの関わりへの理解がそれである。

### 8.3 教科書、参考資料における因果関係を表す接続表現の扱われ方

8.2 では、本論文の対照分析結果を踏まえ、中国語母語話者の日本語学習者にとって日本語の因果関係を表す接続表現を習得する際の難点について、用例を示しながら述べた。本節では、そういった習得上の難点を念頭に置き、日本語教育において、それらが既に意識されているか否かといった現状を知るために、学習者にとって重要な情報源となる教科書、文法解説書について調べると同時に、日本語教育現場向けの教師用マニュアルにおける因果関係を表す接続表現に関する説明についても調べる。また、日本語表現文型の参考書における解説にも目を向ける。これらの作業を通して現状を明らかにすることによって、中国語母語話者の日本語学習者を対象とする日本語教育において、改善すべき点や留意点を提案したい。

ここでは、日本で使用されている日本語の教科書、教師用マニュアル、中国語による学習者向けの解説書などを取り上げた上で、中国語で出版され、より広く使用されている教科書をも2セット取り上げることにした。教科書を取り上げる際、初級か中級を拘らず、「から・ので・て・ため(に)」が扱われているものを調査対象とする。この調査を行う主な目的は、教科書分析を目的とせず、幅広く調べることによって、「から・ので・て・ため(に)」といった因果関係を表す接続表現が文法項目としてどのように取り上げられているかといった現状を知った上で、問題点を見出すことが目的である。

調査を行う際に、「から・ので・て・ため(に)」の意味機能に関する解説は綿密かつ適切であるかどうか、用例の使用には偏りがあるかどうか、様々な文要素との関連性についての説明が行われているかどうか、学習者の母語との相違点への考慮が反映されているかどうかといった点に注目したい。

分析方法は次の通りである。まず、調査資料より、「から・ので・て・ため(に)」に関する解説、用例をピックアップし、一覧表にまとめる。そして全体を通して問題点の傾向性を観察する。

各調査資料における「から・ので・て・ため(に)」の扱われ方をまとめると、【表 44】のようになる。

【表44】教科書、参考資料における因果関係を表す接続表現の扱われ方

出版国	書名	提出課題	接続表現	解説	用例	備考
日本 で出版されたもの	『みんなの日本語初級Ⅰ』	9	から	なし	① さあは子どもの誕生日です <u>よ</u> 、早く帰ります。 ② 毎日新聞を読みますか、いいえ、時間がありません <u>よ</u> 、読みません。	「から」は文末のモダリティと共に起する用例は提示されていない。
		39	て	なし	① ニューズを聞いて、びっくりしました。 ② 土曜日はちょっと都合が悪く、行けないです。 ③ 遅くなりました、すみません。 ④ 家は雨の中で運転がなくて、バスが遅れてしまったんです。 ⑤ 電話をもらった、安心しました。 ⑥ 家族にあえて、寂しいです。 ⑦ 問題が難しく、わかりません。	「て」を文末の「のだ」と共に起させる「～て、～のだ」構文の登場。 主に感情表現が使用される用例の扱。 「から」で「～て」を言い換える「～て、すみません」のような慣用的表現の導入。
	『みんなの日本語初級Ⅱ』	39	ので	なし	① 体の調子が悪いので、病院へ行きます。 ② 用事があるので、お先に失礼します。 ③ 遅れがひどい <u>よ</u> 、みんな心配してたんですよ。 ④ バスおそれるので、学校に遅れました。 ⑤ 良病院へ行くので、5時に帰っていいですか。 ⑥ A: 最近市庁で寝ていますが、便利です。ね。 B: ……のがどうしていいんですか。 A: 部屋が狭くて、邪魔なので、友達にあげました。	「～て、～ので、…」といった複数の原因節が使用される用例の登場。
		9	から	なし	① さあは子どもの誕生日です <u>よ</u> 、サントスは早く帰ります。 ② 忙しいです <u>よ</u> 、どこも行きません。 ③ 時間がありません <u>よ</u> 、タクシーで行きます。	疑問節「どうして」で理由を尋ねる方法と問いに対する理由を述べる方法の導入。 「～から」は否の日本語の語順に影響されて、文頭に「から」を用いた例が多いので、導入のときだけでなく、練習の都度よく確認するといった留意点が提示されている。
	『みんなの日本語初級Ⅰ 教え方の手引き』	39	て	① 「～て」は「～で」は、後件の原因を表す。後件に意志を含んだ表現はない。この際は後件に主語に「ひくく」の「～て」の「～る」「～れい」「～しい」「～しい」「～たい」などの感情を表す表現を中心に扱う。 ② 前件が否定、後件が肯定に起こると時間的前後関係がある。	① 花をもらって、うれしかったです。 ② 借腹を見る、びっくりしました。 ③ 日本が負けて、残念です。 ④ 漢字が難しくかかると、困りました。 ⑤ 漢字が難しくかかると、困っています。 ⑥ 隣の犬がうるさくて、寝られません。	「～るさくて、寝ません」などのように、後件に意志的表現が使用例が多い。前件が「～て」でなく、自分の意志はかかわらない後件の状態であることを表すという留意点が提示されている。 後件に主語に感情を表す表現を中心に扱うことを留意している。 前件と後件には時間的前後関係があることを述べている。
		39	ので	① 「～で」は第3課で学習した「～から」同様、原因・理由を表すが、以下の理由がある。「～から」は、話し手が自分の考えを言っていて、その理由を聞き手に明確に伝えたいときに使うのに対して、「～で」は、現実である、またはすでにあった事態や状況の事情説明をするのである。 ② 聞き手に対するインパクトが強い場合、許可を求める理由や弁解を柔らかく表現するのによく用いられる。 例: 急な用事、お先に失礼します。 用事があるので、お先に失礼します。	① わたしは中国語がわからないので、日本語をお願いします。 ② 熱かったので、休みました。 ③ 遅くてすみませんから、遅くありませんでした。 ④ 忙しいので、どこにも行きません。 ⑤ 気分が悪いので、早退してもいいですか。 ⑥ 雪で新幹線が止まったので、会議が遅れました。	「～から」で「～で」の機能的な違いについて述べられている。 「～で」は文末モダリティと共に起する場合もあることについてはふれていない。
	『文化初級日本語Ⅰ 解説書 (簡体字版)』	13	から	● (基本形)「から」 ① 「から」は「基本形」で「です、ます」の後に、表示主張、否定、感嘆の理由又は事物発生の原因、汉语译为「因为…所以…」。 ② 「から」は「基本形」である「です、ます」の後に接続する。主観、意見、感嘆などの理由および物事発生の原因を表す。中国語の「因为…所以…」に相当する。 中国語の「因为…所以…」に相当する。	① A: どうしていいですか。 B: 安全が心配です。 もう遅れましたから来いします。	「から」は文末のモダリティと共に起する用例は提示されていない。 「から」は中国語に相当する場合、「因为…所以…」に置き換えることを断言している。
		14	ので	● (動詞/形容詞(基本形)「～で」) ① 「～で」は助詞、表示原因、理由、相当于汉语的「因为…所以…」。「(中略)」の目的主観性影響対「から」表現と異なる。比較対照的表現。理由、原因、発生原因・理由・理由時使用の「～で」。 ② 「～で」は助詞である。原因、理由を表す。中国語の「因为…所以…」に相当する。(中略)「～で」は主観的ニオアンスは「から」ほどはっきりしていない、ゆえに意見、理由、依頼を言う時、または客観的に理由を述べるときに「～で」を用いる。	① 休憩時間が短かったので、私はバスを降りなかった。	「～で」は文末のモダリティと共に起する用例は提示されていない。 中国語の「因为…所以…」に相当すると断言している。
	『文化初級日本語Ⅱ 解説書 (簡体字版)』	34	て	● (動詞否定形)「～なくて」 ① 結果要は動詞否定形式で表現する理由時、便宜表現「～なくて」の形式「～なくて」一般に表現人物感情、事物状態方面的内容。重要意図的は個人意志能改善的の事情不能使用「～なくて」的式来表現原因、理由。 ② (動詞の否定形)による理由を述べると「～なくて」といふ形式を取る。「～なくて」の後ろに、一般に人の気持ちや事物の状態などを表す表現が後接する。ここで注意しなければならないのは、個人の意志によって変えられる事情の場合は、「～なくて」を使用して原因・理由を表さうとすることができない。	① 息子が親の言うことが聞かなくて、困っています。 ② お金がなくて大変なんです。(沒有钱不能笑) ③ 私はめがねがなくて困っています。(服用例)	「～なくて」は意志表現との不具合に触れている。 「～なくて」の後ろに結果を表現する特徴について言及している。 中国語の「因为…所以…」に相当すると断言している。
		39	「の」で「から」の比較	1. 原因・理由を表す。 動詞「から」が論理的に原因・理由→結果→結論を述べ立てるのに比べ、「の」ではこのように推移で、自然にその原因・理由を強調し、促して、「の」では、「から」に比べて、結果・結論の文法的に強調している。 2. サービスなど、丁寧さを意識する場合は、「は」「は」の「の」が使用される。 「は」がおすすめです。ご注意ください。(ひらのアナウンサー)	① 悪い(○)から/△(○)ので、窓を開けてください。(依頼) ② 悪い(○)から/△(○)ので、窓を開けてください。(依頼) ③ 悪い(○)から/△(○)ので、窓を開けてください。(依頼) ④ 悪い(○)から/△(○)ので、窓を開けてください。(依頼) ⑤ 悪い(○)から/△(○)ので、窓を開けてください。(命令) ⑥ 悪い(○)から/△(○)ので、窓を開けてください。(禁止命令)	「の」で文末のモダリティの制約を受ける場合があることを指摘している。 「の」で文末のモダリティと共に起する場合は丁寧さが上がるという点について言及している。
	『実力日本語(下)単語・文法解説書——豊かな語彙・表現力をめざして——』	39	～して、～の	原因・理由が複数ある場合、1つの文の中に、「の」で「から」を2つ使うことはできない。その場合は、「(の)の」の後ろのまとも、その句全体を「の」で「から」で受ける。これは、「(の)の」で「の」で「から」より強弱で、句中に「の」で受けるのである。この意味で、このように、接続関係を築く動詞の中には、力関係の強弱がある。	① (悪い、寝た)10ので、休みました。 ② (悪い、寝た)10から、休みました。	原因・理由が複数ある場合、「の」で「から」を2つ使うことができないという原因節を構成するルールが「の」で「から」に適用される。
		58	ため(に)	1. 理由・原因を表す。目的「ため」とは違う。「ため」の後の「に」は「ついで、ついで」でも「理由・原因」は、客観的な事実についてだけ使われる。文末で、読者の主観的な意志を言うことができない。これは「ため」の2つの点である。 ① 「ため」に動詞が来る。「(名詞)の」の形だけ。 ② 「ため」の前の動詞は意志動詞である。 ③ 「ため」の後の文は、意志的な文だけ。 ④ 「ため」には、前の文と後の文は、同一主体である。理由・原因の「ため」にはこのような制限がある。	① 悪い(○)から/△(○)ために、窓を開けてください。(依頼) ② 悪い(○)から/△(○)ために、窓を開けてください。(依頼) ③ 悪い(○)から/△(○)ために、窓を開けてください。(希望) ④ 寝た(○)から/△(○)ために、休むつもりです。(意志)	「ため(に)」は文末のモダリティ表現の制約を受けることを指摘している。 原因・理由を表す「ため(に)」と目的「ため(に)」上の構文制約の違い。
	『実力日本語(下)単語・文法解説書——豊かな語彙・表現力をめざして——』	39	から 理由… 原因…	1. (前件)理由から、… 文末には、話し人の意志を表す文(「～たいです」「～つもりです」など)や動詞がけの文(「～ないです」「～てください」など)が来る。強く推測するので「～から」は使わない方がいい。	① △ 辞書を忘れたから、ちょっと見てくださいませんか。 ② ○ 辞書を忘れたから、ちょっと見てくださいませんか。	「から」は文末のモダリティ表現と共に起することが多いことを指摘している。 話の円滑さを保つため、場合によって、「から」の使用を避けたいという点も述べられている。
		39	～て、 理由… 原因… 理由…	1. 「～て」の前が原因・理由を表す。原因・理由を表す「～て」の前文と後文の文法が違っていない。 2. 「～て」の後ろの文は不自然現象や目的・意志・身体的な状態を表す表現(困る、大笑、寝た)などが多く、話し人の意志を表す文や、相手への働きかけの文は少ない。	① × 寝た、休みました。 ② 寝た、休みました。 ③ おくれて、すみません。 ④ 行けなく、すみません。	慣用表現 「～て」の使用は、前後期が主語が統一されていてもよい。 文末はモダリティ表現が関係ない。 「～て」の後ろには、心的または身体的な状態を表す表現が多く使用される。
	『どなたとどう使う日本語表現文型200』 中国語訳あり	39	～ので 理由…	1. (原因・理由)で、…、後ろの文で結果ややりかたを言うことが多い。文末が命令形や禁止形の文はない。 ○ うるさいよ、やめろ。 × うるさいよ、やめろ。 2. 個人的な意見・感想を述べるときは、「～ので」のほうが「から」が改まった感じが表現される。 3. 「ので」です。理由で使われる。 4. より丁寧な言い方は、丁寧な接続詞を使うことである。	① おおふが悪いよ、おしをいれしました。 ② 本体に家族に会いました。みんな、元気だったので、安心しました。 ③ すみません、ちょっと悪いよ、まどを開けてください。まどが、 ④ 今、調べています。少しお待ちください。 ⑤ あしたは休みのので、友達と映画を見に行きます。	文末のモダリティ表現の制約を受ける場合がある。 「～ので」より改まった感じが表現される。 「～ので」には「ので」の用法がない。 丁寧な接続詞を使うこともある。
		39	～ため(に) 理由…	1. 原因・理由(に)、…、普通ではない結果となった原因について言う。書き言葉より、普通のことに使われる。自然な文になる。 △ おおふが悪いよ、おしをいれしました。(普通の事) ○ おおふが悪いよ、おしをいれしました。(普通の事) 2. 「～ため」の後ろには、話し人の意志を表す文や依頼などの表現はない。 × うるさいよ、静かにしてください。 ○ うるさいよ、静かにしてください。	① (車のホーンで)大音のため、電車が遅れています。 ② 数学の問題は数が多かったため、時間が足りなかった。 ③ 田中さんは出席日数が足りなかったため、卒業できませんでした。 ④ この町は交通が不便なため、バイクを利用する人が多い。	普通のことに使用すると不自然になる。 文末のモダリティ表現と共に起しない。

出版国	書名	提出課	接続表現	解説	用例	備考
中国で出版されたもの	《中日交流標準日本語》(上・下)	13 (上)	から	1. “から”接在“～です”“～ます”后面、它前面的部分是原因、理由、后面的部分是结果。 〔「から」は「～です」「～ます」に後接する。「から」の前の部分は原因・理由であり、後ろの部分は結果である。〕 2. “甲です(ます)から、乙です(ます)”相当于汉语的“因为甲, 所以乙”。 〔(甲です(ます)から、乙です(ます))は中国語の“因为甲, 所以乙”に相当する。〕 3. 汉语的“因为”位于表示原因内容的词语之前、而日语的“から”则位于其后、注意不要混淆。 〔中国語の“因为”は原因を表す内容の前に来るが、日本語の「から」はその後に来るので、混乱しないように気をつけろ。〕	① 明日は日曜日ですが、会社は休みです。 ② いろいろありますが、とても便利です。 ③ 値段が安いですが、毎日おせいの人が利用します。	・「から」は中国語の“因为…所以…”に相当すると記述している。 ・「から」の位置は、中国語の原因・理由を表す表現の位置とは違うことに言及している。 ・「から」は文脈のモダリティ表現と共起しやすいことについて述べていない。
		28 (下)	ので	・表示前句は后句所述事物的原因或理由。“ので”前面用动词或形容词的普通体。“ので”和“から”表示的意义大体相同。 〔前句が後句で述べた事柄の原因・理由であることを表す。「ので」の前に動詞あるいは形容詞の普通体を用いる。「ので」は「から」によって表された意味が大体同じである。〕	① 雨が降いたので、仕事を休みました。 =雨が降りました、仕事を休みました。 ② 日曜日は、雨が降ったので、出かけませんでした。 =日曜日は、雨が降ったので、出かけませんでした。 ③ 病気がひどいので、仕事を休んでいます。 =病気がひどい、仕事を休んでいます。	・「ので」は「から」によって表された意味とはほぼ同じである。 ・「ので」は文末のまだモダリティ表現との関わりについてはふれていない。
		35 (下)	て	…「て」、(理由) …「くて」、…「て」、～ ・表示前句は后句所述事物的原因或结果。 〔前句が後句で述べた事柄の原因・理由であることを表す。〕	① 風邪をひいて、学校を休みました。 ② 雨が降って、勉強ができません。 ③ 工場の機械化が進んで、生産台数が増えました。	・「て」を使用する文の特徴や文末表現の制約を受けやすいことについてはふれていない。
		38 (下)	ために(に)	…「ために」(原因・理由) …「ために」、～ 表示原因和理由。前面多接动词的“た形”和“ない形”、名词后接“ために”时、两者之间加“の”、使之形成“のために”的形式。 〔原因・理由を表す。「ために」は動詞の「た形」と「ない形」に後接する場合が多い。名詞の後には「ために」が来るとき、両者の間に「の」を付加して、「のために」形式となる。〕	① 雨が降らないために、作物が育ちません ② 事故があったために、会社に遅れました。 ③ 運動不足のために、体の調子がよくありません。	・「ために(に)」は動詞の「た形」と「ない形」に後接する。 ・他の接続表現の使い分けや使用上の留意点については、述べていない。
	《基礎日語教程》第1冊 第2冊	11 第1冊	て	1. 动词的第二中止形在句中中可以表示原因、理由。 〔動詞の第二中止形は文中に原因・理由を表すことができる。〕 2. 动词的第二中止形主要用于表示原因、而基本上不表示理由。 〔動詞の第二中止形は主に原因を表すが、基本的に理由を表さない。〕 3. 动词的第二中止形表示原因时、句尾的谓语动词一般不能采取命令形式。 〔動詞の第二中止形によって原因が表される場合、文末の述語動詞は命令形式をとってはならない。〕	① 雨に濡れて、風邪を引いた。( 秋雨淋、感冒了。 ) ② 朝寝坊をして、学校に遅れた。( 睡懶覺、上學遲到了。 ) ③ 佐藤さんは風邪を引いて休んでいます。 ( 佐藤因感冒請假了 )	・動詞の中止形は主に原因を表し、基本的に理由を表さず、文末のモダリティ形式と共起できないことを指摘している。
		11 第2冊	から	1. 表示说话人认为前句所指称的事件与后句所指称的事件之间存在因果关系、因此这种表达方式主观性较强。 〔話し手は従属節の事柄と主節の事柄の間に存在している因果関係を一種の客観的な事実として表す。〕 2. 多用于表达说话人态度的句子、具体地说、正句句尾的形式没有什么限制、一般可以表示命令、劝诱、禁止以及说话人的意志、判断、责备等。 〔話し手の態度を表す文に多く使用される。具体的に言えば、主節の文末表現の制約はあつたもので、一般に命令、勧誘、禁止または話し手の意志、判断、非難などを表すことができる。〕	① 足が痛いのだから靴を履き替えます。 ( 脚疼、应该更換一雙鞋。 ) ② 寝たがために、少し休みませんか。 ( 睡了、歇會兒吧 ) ③ 時間がいいから急いでください。 ( 没时间了、請快一點兒 ) ④ ここは危険だから、ここで泳いではいけません。 ( 這裏危險、不能在這裏游泳 ) ⑤ この池は水が汚いから、多分、魚がいないでしょう。 ( 这个池塘水很脏、大概没有魚吧。 )	・「から」は主観的な因果関係を表すことを記述している。 ・「から」は文末表現の制約を受けにくく、モダリティ表現と共起する場合が多いことについて言及している。 ・文末にモダリティ表現が来る相場の中国語訳は工夫されている。接続表現の使用が避けられ、中国語の接続表現の機能と表現内容との関係が考慮されている。
		11 第2冊	ので	1. “ので”使用するとき、話し手は従属節の事柄と主節の事柄の間に存在している因果関係を一種の客観的な事実として表す。 〔「ので」の正句句尾形式は少くは対話相手の命令、禁止、忠告等、一般に很少用于表示推测、劝诱、请求的句子。〔「ので」文の主節の文末には、相手に対する命令、禁止、忠告などの表現が少ない。一般に推量、勧誘、依頼の表現もあまり使用されない。〕	① 雨が降ったので運動会は中止になった。 ( 因下雨、所以运动会中止了。 ) ② 漢字が分からないので、新聞が読めません。 ( 因不认识汉字、报纸看不懂 ) ③ この部屋は暑くないので、ゆっゆ休めます。 ( 这个房间很安静、可以休息好。 ) ④ 今日は天気がいいので、みんなで遊びに出かけました。 ( 今天天气好、所以大家出去玩儿了。 )	・「ので」によって表されている前後部の因果関係は客観的であることを述べている。 ・「ので」は文末のモダリティ表現と共起することが少ないことに言及している。
		13 第2冊	ために(に)	1. 表示原因和理由时、接在非自主动词、形容词以及自主动词的过去时后面。正句的谓语动词一般都是非自主动词或形容词。 〔義務・理由を表すときに、無意志動詞、形容詞および意志動詞の過去形に後接する。主節の述語動詞も一般に無意志動詞あるいは形容詞である。〕 2. 用“ために”表示原因、理由の句子、其大多数是表示消极意义的、在这点上它与用“から”表示原因、理由的句子有所不同。 〔「ために」で原因・理由を表す文は、多くのものは消極的な意味合いを表している。この点において、「ために」は「から」ので原因・理由を表す文とは違いがある。〕	① 寝ていないために背気がなりやすい。 ( 因没睡觉、所以觉得累 ) ② 寝たために病気がなりやすかった。 ( 睡了、所以觉得病 ) ③ 仕事で忙しいために、家に帰るのが遅い。 ( 因工作忙、所以回家晚 ) ④ 子供がいないために、家の中が明るい。 ( 因没有小孩、所以家里很温馨 )	・「ために」を使用する場合、述語に制約を受ける場合があることを述べている。 ・「ために」文の特徴としては、消極的な意味合いが含まれる場合が多いため、「ために」によって表された原因・理由には「から」のほどには違いがある。 ・「ために」の使用はモダリティ表現の制約を受けることについて述べていない。 ・「ために」の使用は前後部の時間的前後関係との関わりがあることについてもふれていない。

## 8.4 教科書、参考資料における因果関係を表す接続表現の扱われ方の問題点

【表 44】を通して、教科書や解説書などにおける「から・ので・て・ため(に)」の扱われ方には、少なくとも以下の5つの問題点を指摘できる。

- ① 接続表現の提出順序への考慮の問題点
- ② 接続表現の意味機能に関する認識の違い
- ③ 用例の偏りと他言語との対応関係の認識の違い
- ④ 接続表現と構文諸要素との関連性への認識の不足
- ⑤ 複数の原因節における接続表現の使用への認識の違い

以上で指摘した5つの問題について、【表44】の内容に基づきながら、順番に見ていく。

#### 8.4.1 接続表現の提出順序への考慮の問題点

教科書では、簡単なものから複雑なものへといったプロセスで文法項目を取り上げるのが一般的であるが、【表44】で提示された教科書の中には、このようなルールに従わないものも見られた。

日本語だけでなく、中国でも使用されている教科書の『みんなの日本語』においては、「から・ので・て」の提出順序が問題と思われる。『みんなの日本語』では、「から」が初級Ⅰの文法項目としてより早い段階で提出されるのに問題はないが、「て」と「ので」は初級Ⅱの第39課で共に取り上げられている。「て」と「ので」が同じ課で提出されるのは、学習者に両者の類似点と相違点に容易に気づかせることを図っているのかもしれない。しかし、初級段階でありながら、以下のような両者が使用されている原因節の重なり例も提示されている。

(26) A：最近布団で寝ているんですが、便利ですね。

B：・・・ベッドはどうしたんですか。

A：部屋が狭く $\square$ て、邪魔な $\square$ ので、友達にあげました。 『みんなの日本語』初級Ⅱ

初級段階の学習者にとっては、この文の構造と各節の接続表現の機能的な違いに関して、理解しにくいと考えられる。また、同じ課で、「て」を文末の「んです」と共起するものも現れている。文末の「んです」と共起することによって、どんな効果が得られるかについて、初級学習者に説明するのは決して簡単なことではないと思われる。

中国語で出版された教科書にも同様の問題点がある。《基础日语教程》では、意味機能が広い「て」が因果関係を表す表現としてもっとも早く提出されている。「て」は因果関係を表す機能だけではなく、継起関係、並列、逆接などの機能も持っており、「て」によって表されている因果関係は明示的ではない。構文上は、制約を受けやすいため、「て」の意味用法を習得するのが難しいと言える。したがって、因果関係を明示する機能を持つ「から・ので」より早く提示されると、学習者にとっては「て」の曖昧な意味合いを正確に理解できないことが考えられる。

#### 8.4.2 接続表現の意味機能に関する認識の違い

「から・ので・ため（に）」は因果関係を明示する機能をもつが、「て」は因果関係を明示する機能を持たない。このように「て」を使用する文は、前後節の因果関係が「て」によって示されるのではなく、前後節の表現内容から読み取る。そのために、「て」を使用する文の前後節の表現内容は、直接結びつけることができなければ、因果関係を表す複文として考えにくい。「て」を使用する際にはこういった条件を満たさなければならないが、ここで『みんなの日本語』初級Ⅱとその教師用手引きよりそれぞれ2例を取り上げ、検証してみる。

(27) ニュースを聞いて<sup>て</sup>、びっくりしました。 『みんなの日本語』初級Ⅱ

(28) 家族にあえなく<sup>て</sup>、寂しいです。 『みんなの日本語』初級Ⅱ

(29) T：デパートへ着物を買いに行きました。

値段を見ました。びっくりしました。50万円でした。

値段を見<sup>て</sup>、びっくりしました。 『みんなの日本語』初級Ⅱ教師用手引き

(30) 隣の犬がうるさく<sup>て</sup>、寝られません。 『みんなの日本語』初級Ⅱ教師用手引き

上掲用例の(27)(29)は、原因を表すものとして非常に不自然な文になっている。それぞれの従属節の行動は主節の「びっくりした」という心理的な変化を引き起こす原因として考えにくい。「て」は因果関係を明示する機能を持たないので、「て」によって結び付けられている前後節の表現内容は、直接的な論理関係が発生しないと、「て」の使用条件を満たさない。実際に主節の「びっくりしました」という心理的な変化は、「ニュースを聞いて」と「値段を見て」によるものではなく、直接的な原因としては、以下のように考えられる

(27') ニュースを聞いて<sup>て</sup>、(被害者があまりにも多すぎる<sup>から</sup>)びっくりしました。

(29') 値段を見<sup>て</sup>、(あまりにも高い<sup>ので</sup>)、びっくりしました。

(27')(29')では、「ニュースを聞いて」と「値段を見て」は主節の心理的な変化を引き起こす間接的な原因となっていることが分かる。したがって(27)(29)は因果関係を表す複文としては不適切なものだと判断できる。

一方、(28)(30)は従属節が主節の状態を引き起こす直接的な原因となっており、原因を表すものとして認めることができる。

以上で述べたことは第5章で既に言及している。接続表現の機能に関する認識の違いによって教科書の中に不適切な用例が盛り込まれ、多様な機能を持つ接続表現の意味用法や因果関係の理解について、学習者が間違った方向に導かされてしまう恐れがある。

#### 8.4.3 用例の偏りと他言語との対応関係への認識の違い

日本語の因果関係を表す接続表現の使用は文末のモダリティ表現の制約を受ける場合が多いということについては、先行研究をはじめ、多くの教科書、教科書の解説書や教師用手引などにおいて、指摘されている。しかし、日本で出版された『みんなの日本語』、『文化初級日本語』と、中国語で出版された《中日交流标准日本语》では、接続表現を学習文法項目として取り上げる際、文末のモダリティ形式と共起する用例を挙げていない。これらに対して、『実力日本語（下）単語・文法解説書』では、モダリティ表現と共起する用例が中心として提示されている。しかし、モダリティ表現を意識しすぎたためか、他の用法の用例提示はほぼ行われていない。

初級の日本語学習者向けの一部の教科書と解説書では、学習者を混乱させないように、典型的なものを取り上げるのも合理的な考えだと言えるが、新しい文法項目を導入する際、その項目の意味用法は学習者の母語との違いを意識しながら用例をあげたほうが、さらに合理的だと思われる。たとえば、日本語の「から・ので」には話し手がなぜそのような発言をしたり、そのような態度をとったりするのかという「発言・態度の根拠」を表す用法があるが、中国語ではそういった「発言・態度の根拠」を示す用法がない。たとえば、次のようなものを中国語に訳す場合、接続表現を使用できない。

(31) 暑い（から・ので）、窓を開けてください。『実力日本語（下）単語・文法解説書』

太热了，请把窗子打开！

（拙訳）

この点に関しては、中国で出版された《基础日语教程》では、意識されているように思われる。

(32) 疲れた<sup>から</sup>、少し休みませんか。 《基礎日语教程》

累了，歇会儿吧！

(33) 時間がない<sup>から</sup>急いでください。 《基礎日语教程》

没时间了，请快一点儿！

上記の用例は接続表現と文末のモダリティと共起するもので、中国語では因果関係を表す複文だと認識しにくいものであるため、用例を取り上げる際、初級の中国語母語話者の日本語学習者向けの教科書または解説書であっても、提示する必要がある。今回の調査資料では、接続表現と文末のモダリティ表現と共起する用法にふれていない教科書や解説書があるだけではなく、中国語で因果関係を表す複文だと認められていない「感情評価の理由文」の用例がほとんど提示されていない。用例を提示する際に、典型的なものに限らず、学習者の母語と異なった用法の用例を提示し、日本語と中国語の違いを示唆する工夫をするとより合理的であろう。

また、「て」の用法に関する説明は、「て」を使用する場合、後件に意志を含んだ表現が使用されず、感情を表す表現を中心としている記述が多い。当然挙げられた用例も、そういったものが多い。

(34) 息子が親の言うことが聞かなく<sup>て</sup>、困っています。 『文化初級日本語』解説書

(35) 問題が難しくて、わかりません。 『みんなの日本語初級Ⅱ』

実際、主節で意志的な行為が行われる場合、「て」も多く使用されている。この点に関しては、第3章、第5章で既に言及した。ここでは、第3章の用例の一例を再掲する。

(36) 信吾は右に寄ったが、不安を感じ<sup>て</sup>、(φ)懐中電灯をつけた。 『山』

(36)は従属節の「不安を感じて」という心理状態によって、主節の「懐中電灯をつけた」という行動が引き起こされている。このように、「て」の用例を挙げる際、主節の感情を表す表現内容のみに注目せず、「行為の理由」を表す「て」の用例も提示する必要があるだろう。

これまで述べてきた問題の他に、日本語と他言語との対応関係への認識の違いも見られ

る。中国語訳付きの『どんなときどう使う日本語表現文型 200』における原因・理由を表す「から・ので・て・ため(に)」に関する解説では、「～から」は中国語の“由于…，因为…”に、「～て」は“由于…，因为…、由于没…由于不…”に、「～ので」は“因为…”に「～ため(に)」は“由于…”に相当すると記述している。このような記述は、厳密さと正確さに欠けている。実際日本語の「から・ので・て・ため(に)」が中国語に訳される場合、それに対応する中国語表現はバラエティに富んでおり、「から・ので・て・ため(に)」に対応する表現は、決して“因为／由于”だけではない。

また、『文化初級日本語 I』では、「から・ので」は中国語の“因为…所以…”に訳されることを断言している。中国語で広く使われている《中日交流标准日本語(上)》においても、「[甲です(ます) から、乙です(ます)]は中国語の“因为甲，所以乙”に相当する」と記述している。事態原因を表す「から・ので・て・ため(に)」であれば、“因为甲，所以乙”に相当すると言えるが、次のような用例の場合、中国語母語話者の日本語学習者にとっては、“因为甲，所以乙”に相当することとは非常に結びつけにくい。

(37) うるさい から、やめろ。

「から」のこのような用法に対応する因果関係を表す表現は中国語にはない。日本語の原因・理由を表す接続表現は中国語の“因为甲，所以乙”に相当すると教えると、中国語母語話者の日本語学習者がそういった表現の機能を正確に理解できなくなり、日本語では(37)のようなものも因果関係を表す複文の一種だと認識しにくいだろう。

#### 8.4.4 接続表現と構文諸要素との関連性への認識の不足

接続表現の使用は文末のモダリティ表現との関係については、今回取り上げた調査資料の中でふれていないものもあるが、『実力日本語(下) 単語・文法解説書』『どんなときどう使う日本語表現文型 200』と中国で出版された《基础日语教程》では、それに重点が置かれている。しかし全体を通して、接続表現の使用とモダリティ以外の構文要素との関連性に関する説明は非常に少ない。「から・ので」の使用は構文要素の制約を受けにくい、因果関係を表す機能だけでなく、他の意味関係も表せる「て・ため(に)」の使用は、構文要素の制約を受けやすい。「て・ため(に)」は文末表現の制約を受けるだけでなく、テ

ンスや述語動詞などの制約を受ける場合もある。

『どなたときどう使う日本語表現文型 200』では、「て」と主語との関わりについて「原因・理由を表す「～て」の前の文と後ろの文の主語が違っていてもよい」と記述しているが、厳密ではないと言える。主語には有情物と非情物とがあり、従属節と主節の主語が同一ではない場合、「て」の使用は主語の制約を受けやすい。ここでは、第5章で提示された用例を再掲し、検討してみる。

(38) 内儀さんが言ったので、杏子ははっとした。 『あ』

(39) 目の前に明りの出た家が一軒あつて、島村ははっとしたが、…。 『雪』

(38)の従属節と主節の主語のいずれも有情物であり、この用例の「ので」を「て」に置き換えると、非常に不自然な文になってしまう。

(38') \* 内儀さんが言って、杏子ははっとした。 『あ』

しかし、従属節と主節の主語が異なっている(39)は、「て」が使用されていても、極めて自然な文になっている。(38')が「て」を使用すると不自然になる理由は、従属節と主節の主語のいずれも有情物だからである。(39)は主節の主語は有情物であるが、従属節の主語は非情物になっているため、「て」の使用が許容される。このように、原因・理由を表す「～て」の前後節の主語が違っていてもよいと言うと、非常に厳密ではないと言っても過言ではないだろう。「て」を使用する場合、前後節の主語が異なってもよいが、従属節の主語が非情物でなければならない。

接続表現の使用とテンスとの関わりについては、中国で出版された《中日交流標準日本語(上)》では、「ため(に)」の前の動詞のテンス形式が「た」形である場合が多いと指摘している。また、《基礎日本語教程》においても、「「ために」は原因・理由を表すときに、無意志動詞、形容詞および意志動詞の過去形に後接する。」と記述されている。従属節の述語のテンス形式について言及されているが、従属節と主節の時間関係は従属節事態が主節事態後に起こる場合になると、「ため(に)」の使用が許容されないことについては述べていない。

(40) あした友だちが遊びに来るので、今日食べ物をたくさん準備しておきました。

「ので」は前後節の時間関係の制約を受けないために、使用できるが、「ため(に)」に置き換えると、

(40') \* あした友だちが遊びに来るために、今日食べ物をたくさん準備しておきました。

「ため(に)」文を使用する場合、従属節事態と主節事態の時間関係は継起的な発生でなければならないため、(40')のように、主節で「食べ物をたくさん準備しておきました」という時点で、従属節事態はまだ発生していないという従属節が主節に後続する時間関係は「ため(に)」の使用条件を満たさない。日本語の接続表現の使用はテンスの制約を受ける場合があるが、そういった点については語形変化を持たない中国語を母語とする日本語の学習者にとっては、非常に理解に苦しむところだと言える。このように、教科書、学習者の母語で書かれた解説書などを作成する際に、日本語の接続表現の使用は、モダリティ形式だけではなく、主語、述語の性質、テンス形式、前後節の時間関係との関わりも考慮し工夫すべきだろう。

#### 8.4.5 複数の原因節における接続表現の使用への認識の違い

日本語の因果関係を表す複文では、一文では複数の原因節が使用される場合がある。原因節が複数である場合、接続表現の機能によって構成していかなければならない。『実力日本語(下)単語・文法解説書』では、「原因・理由が複数ある場合、1つの文の中に、「ので」や「から」を2つ使うことはできない。その場合は「て」の形で前の句をまとめ、その句の全体を「ので」や「から」で受ける。これは、「て」の力が「ので」や「から」より弱いので、句の中にくることができるのである。この逆はできない。このように接続機能を果たす助詞の中には、力関係の強弱がある」と述べている。ここでは、『実力日本語(下)単語・文法解説書』で挙げられた用例を提示した上で、本研究の第7章のいくつかの用例も再掲し、検証してみる。

(41) 働いて、疲れたので、休みました。 『実力日本語(下)単語・文法解説書』

- (42) 夕方から気温が下がって寒くなったので、杏子はずっと囲炉裏端に坐っていた。『あ』
- (43) 克平は会社の客と食事をするといていたので、どうせ帰宅は遅くなるだろうと思っ  
て、八千代は先きに風呂にはいった。『あ』
- (44) その晩は久し振に蕎麦を食ったので、旨かったから天麩羅を四杯平げた。『坊』

(41) (42)の原因節は「～て、～ので」によって構成され、力関係の強弱で言えば、「弱⇒強」の構成順序になっている。(43)の原因節は「～ので、～て」によって構成され、「強⇒弱」の構成順序になっている。(44)は「～ので、～から」が使用され、「強⇒強」の構成順序になっている。実際多くの場合「弱⇒強」の構成になっているが、(43)のように、二つ目の原因節と結果節の間に因果関係だけではなく、時間的な継起関係も含まれているため、「て」の使用がより適切だと言える。(43)の「て」と「ので」の位置を入れ替えると、かえって不自然なものになってしまう。

- (43') \* 克平は会社の客と食事をするといて、どうせ帰宅は遅くなるだろうと思っ  
たので、八千代は先に風呂にはいった。『あ』

(43')が不自然な文になっている理由は、一つ目の原因節の主語と二つ目の原因節の主語が同一主語ではない上、有情物でもあるため、「て」の使用は許容されない。一方、(43)の二つ目の原因節の主語は結果節の主語と同一人物であり、従属節と主節間に継起関係も含まれているため、「て」の使用が許容される。

また、(44)は、原因節が「強⇒強」の構成になっており、「から・ので」は同じ文で使用されているが、不自然な文に思えない。

このように、複数の原因節が使用される場合、「弱⇒強」の構文順序で原因節を構成しなければならないと断言せず、「強⇒弱」「強⇒強」という構成もあるのを示唆すべきであろう。

以上、教科書や解説書などにおける「から・ので・て・ため(に)」の扱われ方を調査し、それらに潜む問題点を指摘した上で検討を行った。

次に、本研究の対照分析結果と、本章のこれまでの記述を踏まえて、日本語教育への提案を試みる。

## 8.5 日本語教育への提案

日本語教育においては、中国語母語話者の日本語学習者を教授対象とする場合、以下のようなことを考慮し工夫すれば、よい効果が得られると思われる。

### 8.5.1 教科書、解説書作りと学習者の母語への考慮の重要性

日本語の因果関係を表す接続表現の機能は中国語とは違い、「から・ので」のような接続表現は広範囲に使用され、単なる事態の原因だけではなく、発話の態度の根拠、行為の理由、評価の理由などを表すことができる。一方中国語は、因果関係を表す接続表現はロジック性が強いいため、前後節の表現内容によって、因果関係を表す機能を持つものに限らず、接続機能を持つ副詞などの使用も求められる。また、接続表現が使用されないものも極めて多い。

中国では接続表現の使用は必須とされない場合が多いので、中国語母語話者の日本語学習者にとっては、接続表現の使用が必須とされる日本語を学習する際に、日本語における接続表現の重要性が意識されにくいと考えられる。また、日本語で因果関係を表す複文として扱われているが、中国語では因果関係を表す複文として認識されにくいものもあるため、日本語の因果関係を表す接続表現の使用範囲や因果関係を表す複文の体系に関する認識の違いが生じやすいと考えられる。こういった問題点があるために、教科書や中国語学習者向けの解説書を作成する際に、様々な工夫が必要とされるだろう。以下は筆者の考える工夫である。

因果関係を表す接続表現を学習項目として取り上げる場合、まずもっとも代表的かつ使用率の高いもの、そして、因果関係をはっきりさせる機能を持つ「から・ので」を提出する。というのは「から・ので」は構文諸要素の制約を受けにくいいため、機能が多いために、運用上は「て・ため(に)」ほど難しくはないからだ。そのため教科書では、「から」→「ので」→「て」→「ため(に)」という順序で提出するのがより合理的だと思われる。「て」は構文諸要素の制約を受けやすいため、使用方法はより複雑であるので、「ので」より先に提示することを避けたほうがよい。また学習者を混乱させないように、「ので」と同時に提出することも避ける必要がある。「ため(に)」は普段の会話ではほとんど使用されなく、文章の中で多く使用される表現であるため、使用率は「から・ので・て」より低い。構文

要素の制約を受けやすく、容易に使いこなせない表現なので、提出段階は「から・ので・て」より遅らせたほうがよい。

なお、「から」がもっとも早く提出され、学習者に強いインパクトを与えるため、「ので」を提出する際に、「ので」と「から」の意味機能の違いや使い分け、丁寧さについて説明しておく必要がある。両者のニュアンスには微妙な違いがあり、特に丁寧さに関しては、学習者に認識させないと、上級レベルになっても、状況を問わずに常に「から」を使ってしまう傾向があることが予想できる。また、接続表現は文末の「のだ」と共起する用例の提出段階にも工夫する必要があるが、初級の後半に提出したほうが良いと思われるが、提出する際に、「のだ」との共起によって得られる効果についても学習者に認識させるべきである。解説書には用例を挙げる場合、接続表現のみを使用した用例と、接続表現と文末の「のだ」と共起する用例を同時に提示した上で、中国語訳を付加する。そうした工夫によって、接続表現を「のだ」と共起させる効果への理解を高めると同時に、「のだ」の機能や使用方法に関する理解も高めることができるだろう。

用例を提示する際には、接続表現の特徴をはっきり出せるかどうか、適切であるかどうかを心がけなければならない。単なる事態原因を表すものだけではなく、モダリティ形式と共起するものや、行為や感情的な評価の理由を表すものなどの提示も少しずつ盛り込めば、学習者が日本語の因果関係を表す接続表現の機能の多さおよび使用範囲への認識を高められ、同時に接続表現の脱落を防止する効果も得られるだろう。

中国語母語話者の日本語学習者向けの解説書を作成する際には、接続表現の意味機能を解説した上で、接続表現の使用上の制約に関して文末のモダリティ表現ばかりではなく、テンスや主語などとの関連性についても綿密に説明しておくことが大事である。中国語では、接続表現の使用は、アスペクトの制約を受ける場合があるが、テンスの制約を受けない。また、主語が有情物か、または従属節の述語動詞が意志動詞かとは関係なく、そういった制約を受けない。したがって、解説書では、従属節の主語の制約を受けやすい「て」と従属節のテンスの制約を受けやすい「ため(に)」についての記述があれば、学習者誤用例を減らせることにつながるだろう。

上記の提案の他、今ひとつ中国語母語話者の日本語学習者向けの解説書や中国語訳付き教科書を作成する際に、提示された用例に的確な中国語訳を付ければ、学習者に両言語の対応関係に気付かせられ、同時に、日本語の接続表現の機能や使用範囲と中国語との違いも認識させることに役に立つであろう。

## 8.5.2 日本語教育現場における他言語に関する知識の必要性

対照言語学では、母語以外の言語を学ぶ時、母語が言語学習に影響する可能性があると考えられている。特に、母語と目標言語の異なったところが学習上の難点となることは否めない。したがって、言語を教授する側が、学習者の母語を含めて多様な言語に関する知識を持っていると、言語教育において活用できることが多いと思われる。学習者が中国語母語話者の場合、教師として、中国語と日本語の様々な面においての類似点と相違点を把握し、教える際に、学習者の母語と目標言語のそれぞれの特徴を認識させれば、より効果的であろう。

たとえば、日本語の原因・理由を表す「から」「ので」について教える時に、単に「から」は主観的であり、「ので」は客観的であるといった両者の使い分けについて説明するだけではなく、「から」「ので」の意味機能の広さについて説明することも必要だと思われる。多くの実例を通して、「から」「ので」が表現内容の制約を受けず、多様な原因・理由を表すことを学習者に認識させる。また、中国語との対応傾向に言及し、「から」「ので」は単なる“因为”“所以”と対応するだけではなく、表現内容によって他の表現の使用も求められることも学習者に認識させると、「から」「ので」の意味機能に関して正しく理解できるようになるだろう。

さらに、中国語における接続表現の省略傾向、両言語の因果関係を表す複文に関する認識の違いといったことを念頭に置き、日本語と中国語の対照実例を通して、学習者に母語と目標言語の相違点を認識させることは、接続表現が抜けたりすることの防止効果があると言えよう。

中国語は語形変化を持たないので、テンスが存在するかどうかについては、まだ曖昧な段階であるため、中国語母語話者にとっては、日本語のテンスへの理解は非常に難しく、混乱を招きやすいと考えられる。こういった両言語の相違点が誤用を生む原因だと思われるので、教える際、そういったことを意識しながら、工夫することによって学習効果を高められるだろう。

また、作文指導においても、中国語の接続表現の使用上の特徴を意識しながら、日本語における接続表現の役割の重要性や、接続表現が文章の中で不可欠である点、また円滑な文章を書くノウハウを学習者に伝えることが学習者の文章能力を高めることにもつながるであろう。特に、複雑な構造を持つ因果関係を表す複文における接続表現の使用と構成ル

ールに関しては、中国語とは異なる制約を受けるため、構造が複雑な因果関係を表す複文における両言語の構成方法や特徴について教師が事前に把握しておき、指導上の留意点、習得上の難点を意識しながら指導を行うと、より効果的であろう。

このように、現場で活躍している教師として、日本語と中国語の相違点ないし類似点を確認しておき、留意すべきポイントを理解し、より効果的な指導方法を練りあげ現場指導に取り組めば、よい結果を望めるであろう。

本章では、第2章～第7章の研究結果を踏まえ、日中両言語の因果関係を表す接続表現の表現類型、接続表現の機能、使用範囲、接続表現と諸構文要素との関わりの相違、構文上の違いを明確にしたことによって、日本語教育における4つの課題を提起し、検証を行った。その上、それらの課題を意識しながら、教科書や教師用マニュアルなどにおける因果関係を表す接続表現の扱われ方の現状を明らかにした上で、教科書などに潜む問題点を見出し、日本語教育への改善案の提示を試みた。本論文の研究成果が日本語教育現場または教科書作りなどに貢献できることを心から願っている。

## 注

### 第8章

- 1) 本章で扱う教科書、解説書、教師用マニュアルなどの出版年、出版社、出版国に関して以下に記す。

書名	出版年	出版社	出版国
『みんなの日本語初級Ⅰ』	1998	スリーエーネットワーク	日本
『みんなの日本語初級Ⅱ』	1999	スリーエーネットワーク	日本
『みんなの日本語初級Ⅰ』教え方の手引き	2000	スリーエーネットワーク	日本
『みんなの日本語初級Ⅱ』教え方の手引き	2001	スリーエーネットワーク	日本
『文化初級日本語Ⅰ 中国語解説書』	1994	凡人社	日本
『文化初級日本語Ⅱ 中国語解説書』	1994	凡人社	日本
『どんなときどう使う 日本語表現文型200』	2003	アルク	日本
『実力日本語(下) 単語・文法解説書』中国語版	2002	アルク	日本
《中日交流标准日语(上・下)》	1988	人民教育出版社	中国
《基础日语教程》	1998	外语教学与研究出版社	中国